

ポッツォーリ大聖堂の再生設計競技案に見る古代遺構の再生手法

黒田泰介

はじめに

イタリアの歴史的な中心地区内には、古代から連綿と続く人間の生活の営みが、層状に重なり合った都市空間や建築物として残されている。このような史的痕跡の積層によって生み出された建物は、歴史的都市のオーセンティシティ(真正性)の一端を物的に示す貴重な事例である。

ナポリの西、約 10km に位置するポッツォーリは、巨大な古代ローマ円形闘技場の遺構に見られるように、海上交易によって大きく栄えた古代港湾都市であった。同市の歴史的な中心地区リオネ・テッラ **Rione Terra** の中にある大聖堂は、史的痕跡の表出によって都市の形成過程が最も劇的に示されている。

ポッツォーリ大聖堂は 1964 年の火災によって、大きな被害を受ける。その際、バロック様式の聖堂背後に隠されていたアウグストゥス神殿の遺構が姿を現した。2003 年に行われたポッツォーリ大聖堂の再生設計競技は、この貴重な歴史的建物のオーセンティシティの尊重、大聖堂としての機能の回復、そして地震や地盤変動への技術的対策を問うものであった。このコンペの内容および実施計画は、歴史的堆積によってつくられた建物がもつ、考古学的・文化的価値を尊重したレストア(再生・利活用)事例として非常に重要なものであり、イタリアにおける歴史的建造物のレストアの理念と手法を理解するのに最適な事例といえる。

本稿は、まず始めに都市ポッツォーリおよびリオネ・テッラの都市形成過程について概観した後、ポッツォーリ大聖堂の再生設計競技について触れ、その内容と意義について考察する。最後に現地調査から、実施された最優秀案における建物のオーセンティシティへの取り組みや史的痕跡の扱い方、技術的解決の実態を報告する。

ポッツォーリとリオネ・テッラ

ポッツォーリがその中心部に位置するフレグレイ平野 **Campi Flegrei**¹は、大小 24 のカルデラが存在し、活発な火山活動が今日も続く火山性カルデラ盆地である。

古代ギリシャ人がイスキアやクーマに植民地を築いた紀元前7世紀末から、フレグレイ平野は湾岸部での通商活動が活発であった。こうした古代港湾都市の中の一つであるポッツォーリは、紀元前 530 年頃に建設された古代ギリシャ植民都市ディカエアルキア

1 フレグレイ **flegrei** の名はギリシャ語の **flègo** (「燃えさかる」の意) に由来する。その雄大な地形より、火の神バルカンの住まう地として神話にうたわれた。また古代ローマ人が好んだ温泉地でもあり、ルクリーノ、アニャーノ、パイアといった都市には公共浴場があった。

Dicaearchia を起源とする²。その後、紀元前 194 年にはローマ植民都市となり、プテオリの名で呼ばれた³。

古代ローマ都市プテオリは、トラリアヌス帝がオステア港を整備し、オステア・アンティーカー市を建設するまで、エジプト産の小麦をローマへと運ぶ中継基地として大いに栄えた⁴。ローマ植民都市の栄華は、海岸沿いに残る市場⁵の遺跡、またイタリア国内で第 3 位の規模を誇る、巨大な円形闘技場⁶の存在に象徴される。ローマ期の市域は海岸沿い及び丘陵部に広がっていたが、繁栄を誇ったローマ都市の痕跡は、今日ではそのほとんどが失われている。

リオネ・テッラは古代ギリシャ期に最初の居住核が設けられた場所である。海を臨むアクロポリスは、ニンダ島とバイアの間、海に突き出した凝灰岩の岬の上に建設された。ここは海からの、また陸からの襲撃に備えるのに最適な場所であった。テッラの名は中世の頃、船乗り達に村や都市を示す *terra* と呼ばれたことに由来する。

西ローマ帝国滅亡後の 5 世紀末から 6 世紀初め、イタリア半島への異民族の侵入と支配に伴い、通商網の破壊と戦闘によって荒廃した街は縮小し、リオネ・テッラの要塞化が進んだ。8～9 世紀には地盤変動によって海際の市域が水没し、砂浜と化す⁷。残されたアクロポリスは城塞化した町 *Castrum Puteolanum* として、ランゴバルド族、後にはカプアを占拠したノルマン人が占拠し、11～12 世紀にかけてクーマ、カプア防衛のための重要な軍事拠点となった。

15 世紀に起こった一連の地震 (1448 年, 1456 年, 1488 年) および地盤変動は、ポッツォーリに大きな被害を与えた。脅威におびえた市民は 1503 年、支配者のナポリ王＝スペイン王に、より安全な土地への住宅建設の許可を請願した。こうして 1511 年、リオネ・テッ

2 S.De Caro-C.Gialanella, “Il Rione Terra di Pozzuoli”, *Electa Napoli*, 2002, pp.9-17.

3 州立自然公園となっている市の背後の丘陵地帯には、ソルファターラ噴火口の大カルデラがあり、ここから漂う火山性の硫黄の異臭 (ラテン語 *putere*) から、この都市名プテオリ *Puteoli* が付いたと言われる。ギリシャ人の地理学者ストラボン (BC63-23) は地理誌 *Geographica* の中で (V, 4, 6) プテオリを「クーマの船の寄港地の一つから始まった、高い位置に築かれた町」として紹介している。

4 港が整備され、カプアとクーマを含む地域を管理する政庁がおかれた。南イタリアは第二次ポエニ戦争、ザマの戦い後の退役軍人によって大規模に開発されたが、フレグレイ平野も軍事的観点のみならず、経済的・通商活動の振興を重視して、積極的な開発が進められた。

5 市場 *Macellum* は、18 世紀にここからセラピス神の像が発見されたことから、一時はセラピス神殿と誤解されていた。58×75m の矩形平面で、28 本の円柱で囲まれた中庭中央には、基壇上に 16 本の柱が並ぶ円堂がある。四本の巨大な柱の背後にはアプスをもつ室が控える。円柱の表面には貝が張りついていた穴の痕跡が多数残り、この遺跡が地盤変動によって、かつては水没していたことを示している。S.De Caro-A.Greco, “Campania”, *Laterza, Bari*, 1993, pp.44-47.

6 ヴェスパシアヌス帝期 (AD1C) に建設された円形闘技場は 19 世紀に発掘され、1947 年に完全に姿を表した。建物は 3 層に分かれ、20000 人の観客を収容した。建物規模は 149×116m、内部のアレーナは 72.22×42.33m である。壁体にはオプス・レティクラトゥムが視認される。アレーナ地下には、剣闘士達の控え室や猛獣を収容した地下室が残る。ポッツォーリにはこの他に、共和制期 (BC2C) につくられた円形闘技場 (130×95m) の遺構が断片的に残る。S.De Caro-A.Greco, 1993, pp.39-44.

7 地盤変動によってナポリ湾岸の土地は水没した箇所も多く、多数の噴火口が水没した。1538 年にも噴火が見られ、市の西側にモンテ・ヌオーヴォ (「新しい山」の意) とよばれる丘を形成した。

ラの北側に最初のボルゴ(市壁外の居住区)が建設された⁸。

湾岸を荒らすイスラム系海賊への対策として 1520 年、サンテルモ城の改修を手がけたナポリ総督ドン・ペドロ・デ・トレド(1532-1553)は、港の再整備と共に市壁を強化した。この際、今日見る要塞のような都市の容貌が決定づけられた。

湾岸および内陸部への住宅建設と移住によって、リオネ・テッラは停滞と荒廃が進み、しまいには市の周縁部の一地区へと転落した。地盤変動は 20 世紀に入っても続き、1911 年にはポッツォーリ再生特別法が公布される。リオネ・テッラの命脈は不安定だったが、1964 年 5 月 16 日に起きた大聖堂の火事で、その荒廃は極まる。

相次ぐ地盤変動による建物崩壊を防ぎ、被害を最小限度にとどめつつ建物の修復を集中的に行うために、1970 年 3 月 2 日、リオネ・テッラの全住民は立ち退きを命じられた。こうして、ポッツォーリの心臓部として古代ギリシャから 2000 年以上の歴史を誇るリオネ・テッラは、無人のゴースタウンと化した。周囲は仮囲いで封鎖され、昨日まで住んでいた街並みは塀の向こう側に隠れた。土地は国とカンパーニャ州によって買収され、修復完了後に再売却されることとなった。1982-84 年の地盤変動は、地区の無人化を決定的なものとした。

P.ソムメラによる考古学的地図(1978)⁹に続き、ナポリ考古学監督局(F.ゼヴィ、C.ジャラネッラ)は航空写真を元に、都市全体の復元地図¹⁰を作成した。地上の修復活動と共に、リオネ・テッラの地下では 1993 年より州政府を主体としてローマ遺跡の発掘調査が進められ、アクロポリスの姿が徐々に明らかとなっていった。現在では約 4000m²の領域が発掘され、考古学博物館としての一般開放に向けて計画が進んでいる¹¹。

2004 年にはナポリの建築家アレッサンドロ・カスターニャーロによって、考古学見学ルートが実現した¹²。地下柱廊 *criptoportico* 内には鉄骨造・半透明ガラスで舗装されたキャット・ウォークとらせん階段が挿入された。見学ルートは人数限定ながら一般開放されたが、続く地盤沈下のために再び地下空間は閉鎖され、現在は州の予算不足もあって、再度の開放はめどが立っていない。

8 R.Giamminelli, "Il centro antico di Pozzuoli", Sergio Civita Editore, Napoli, 1987, pp.29-45. しかし 1538 年に起こった地震は大きな被害をもたらし、多くの住民はナポリへの避難を余儀なくされた。

9 P.Sommella, "Forma e Urbanistica di Pozzuoli Romana", in *Puteoli*, II, 1978.

10 C.Gialanella, "La topografia di Puteoli", in F.Zevi (cur.) *Puteoli*, Napoli, 1993, pp.73-98.

11 ドゥオーモ通りの地下に残るデクマヌス(東西方向に延びる主要道路)の両側には、倉庫やタベルナの遺構が並ぶ。2012 年にはインストラ XVI にて、新に 5 つの部屋が発見された。これらは壁体のオプス・レティクラトゥムより紀元 1 世紀のものと考えられている。デクマヌスは、白く輝くアウグストゥス神殿へと続いていた。聖プロコロ通りはかつての小カルド(南北方向の道路)に相当する。家屋に残る火事の痕跡は、紀元後 62 年のポンペイ地震および 64 年のナポリ地震によるものと考えられている。S.De Caro-C.Gialanella, 2002, pp.19-32. C.Gialanella-C.Valeri, "Puteoli. Nuovi scavi e ricerche" in *Bolettino d'Arte* 118, 2001, pp.5-46. C.Gialanella, "Nuovi dati sulla topografia di Puteoli alla luce degli scavi in corso sull'acropoli del Rione Terra", in L.Crimaco, C.Gialanella, F.Zevi (cur.), "da Puteoli a Pozzuoli", Electa Napoli, 2003, pp.21-34.

12 A.Castagnaro, "Antico e Nuovo", AR 53/04, Bimestrale dell'Ordine degli Architetti di Roma e Provincia, 2004, pp.27-30.

アウグストゥス神殿とポッツォーリ大聖堂

古代ローマ期、アウグストゥス神殿(AD1C)は都市プテオリの象徴であった。凝灰岩の岬の頂に建設された神殿は、周辺に建物が建て込む現在でも、都市のスカイラインの一部を担っている。

アウグストゥス神殿は正面にコリント式の円柱6本、側面に9本(内、正面から3本はポルティコを構成)をもつ、疑似周柱式 pseud-peripteros¹³の神殿だった。神室側壁の柱間を埋める壁体は、擬似的に目地を刻んでいる。

神殿正面のペディメントおよび聖堂の側面入口に掲げられていた碑文¹⁴は、出資者と建築家の名前を示していた。この神殿はアウグストゥス帝をたたえるべく、富裕な商人ルシウス・カルプルニウスの寄進で建立されたもので、建築家ルシウス・コッケイウス・アウクトゥスによって建設された。コッケイウスはオクタヴィアヌス、アグリッパに仕え、初代のパンテオンを建設した人物である。彼は神殿建設と同時に、クーマやナポリで巨大なクリプタの建設を手がけていたといわれる¹⁵。

1964年の火災後、バロック聖堂の床下から、アウグストゥス神殿とは異なる凝灰岩の基壇が発見された。これは共和制期に建設されたカピトリウム(ユピテル神殿)の一部と言われる。カピトリウムの建設は紀元前194年にさかのぼり、スツラによって紀元前78年に修復された¹⁶。

5世紀末から6世紀初め、ポッツォーリ市民はアウグストゥス神殿を、町の守護聖人、聖プロコロを祀る聖堂として転用した。異教の神殿がキリスト教聖堂として転用された事例は、シラクーザの大聖堂¹⁷、アッシジのミネルヴァ神殿¹⁸、さらにはローマのパンテオン¹⁹に見るように、

13疑似周柱式(半周柱式)とは正面側のみが独立円柱であり、後部は柱間を埋める壁と柱が一体となって、完全な周柱式よりも神室:ケラの面積を多く取る形式である。

14これらの碑文は現在、フレグレイ平野考古学博物館(バイア)に収められている。

15 S.De Caro-A.Greco, 1993, pp.39.

16 F.Zevi, "Il complesso architettonico del Rione Terra a Pozzuoli", in "da Puteoli a Pozzuoli", pp.35-39.

17シラクーザの大聖堂はアテネ神殿(BC5C)をキリスト教聖堂として転用したもの。正面6本・側面14本のドリス式円柱に囲まれた周柱式の神殿であった。7世紀にゾジモ司教によりビザンツ様式の聖堂とされ、建物正面が反対側に変更された。1963年の地震により被害を受けた後、バロック様式の聖堂に改修された。聖堂のヴォリュームは神殿の輪郭を、身廊の幅は神室のそれを受け継ぐ。外壁および側廊には取り込まれたドリス式円柱が視認される。

18 アッシジ中心部、コムーネ広場に面してミネルヴァ神殿(BC1C)のファサードが残る。正面6本のコリント式円柱に支えられたペディメントとエンタブラチュアは、良好な保存状態を誇る。神殿内部は1539年にサンタ・マリア・ソープラ・ミネルヴァ聖堂に改造された。内装は17世紀にバロック様式へと変更された。ローマ神殿の繊細なポルティコは、中世の都市空間に深みを与えている。広場の地下には地下柱廊が残る。

19 ローマのパンテオン(126 AD)は609年、東ローマ帝国皇帝フォカスより教皇ボファニティウス4世へ与えられ、サンタ・マリア・デイ・マルティーリ聖堂として転用された。聖堂は紀元1000年頃よりサンタ・マリア・デッラ・ロトンダ聖堂と呼ばれた。キリスト教聖堂として利用されたため、建物は奇跡的に良好な保存状態を保った。ルネサンス期には墓所として、画家ラファエロ・サンツィオ、建築家バルダッサレ・ペルッツィ等が埋葬され、統一イタリア国王ヴィットリオ・エマヌエーレ2世とウ

古代と中世の都市空間が切れ目無く連続するイタリア都市では、しばしば見られる。

ローマ神殿の構造は少なくとも、バロック聖堂の建設まではそのままに残されていた。神室正面の壁を撤去しつつ、ポルティコと神室の空間を一体化し、単身廊の聖堂として使用されていた²⁰。

1538年、火山の噴火によるトリペルゴレ村の陥没とモンテ・ヌオーヴォの造山活動は、建物に多大な被害をもたらした²¹。1636年、スペイン人司教のマルティン・デ・レオン・イ・カルデナスは反宗教改革運動の一環として、大聖堂の再建を決意する。工事は建築家バルトロメオ・ピッキアーティによって進められ、建物は1647年に完成した(火災前の大聖堂平面図(1964年)を参照)。

神殿前には新たなファサードが設けられ、身廊が延長された。神殿正面の円柱4本は撤去され、側面の円柱は壁体内に取り込まれた。また神室北側の壁を取り壊して、新たに内陣が増築された。ここには主祭壇、司教座、聖職者席が置かれた。内陣の背後には1732年までの歴代司教の肖像画が並ぶ、聖堂参事会の間が設けられた。聖堂西側のSS.サクラメント礼拝堂は当初、直接身廊に面してはおらず、手前にある聖プロコロ礼拝堂からアクセスした。1817年には、大聖堂は東側の司教館との間にあるSS.コルポ・ディ・クリスト礼拝堂(1354年建立)と連結された。

大聖堂のメイン・ファサードには中央および左右の2つ、計3つの開口部があったが、右側の入口はSS.コルポ・ディ・クリスト礼拝堂隣に増築された聖具室の入口に、左側は街路側に突き出した洗礼堂の入口に改造された。このため大聖堂内部への出入り口は、正面中央と司教館側の小さな扉の2つとなった。

大聖堂は1940年9月21日の国王通達により国の記念建造物に指定されると共に、教皇ピウス12世によって教皇庁の小バシリカ *basilica minore pontificia* として認定された。しかし1964年5月16日から17日夜にかけて起こった火災により、バロック様式の華麗な装飾と共に、大聖堂の身廊を覆っていた木造屋根は完全に焼け落ちた²²。

大聖堂のレストアは建築家エツィオ・デ・フェリーチェの指揮の下で進められた。続く地盤沈下のためリオーネ・テッラは1970年より無人化した。司教のみが市内に残り、1968年から始まった聖堂の修復作業を見守った。

デ・フェリーチェによって、大聖堂は初めての構造補強工事を受ける。バロック聖堂の中からローマ神殿が取り出され、円柱と神室の壁は露出された。円柱の礎盤、柱身、柱頭、エンペルト1世もここに眠る。バロック期にはベルニーニにより正面に2本の鐘楼が増築された(「ロバの耳」)が、19世紀に撤去された。

²⁰ F.Castagnoli, "Topografia dei Campi Freglei", in *I Campi Freglei nell'archeologia e nella storia, Atti Convegni Lincei*, n.33, Roma, 1977, pp.41-79.

²¹ 修復費用として教皇パオロ3世は1544年にポッツォーリ司教所有の土地を売却し、金貨200ドゥカーティを捻出している。

²² 火災の後、ポッツォーリ大聖堂としての役目は、円形闘技場近くのサンタ・マリア・デッラ・コンソラツィオーネ聖堂が担うこととなった。

タブラチュアには鉄製の補強材が挿入された。欠けた円柱には RC 造のシャフトを抱かせ、独立柱として復元された。考古学発掘調査のために SS.サクラメント礼拝堂の下部がピロティに改造され、カピトリウム遺跡から直接、発掘されたローマ期の地表レベルに出られるようになった。また建物保護のために、遺構全体に鉄骨トラスの仮設屋根が架けられた。

しかし行政上の障害と財政危機は大幅な工事の遅れをもたらし、1972年に修復工事は中断される。その後も考古学的調査と発掘は続けられ、多くの貴重な断片を発掘したが、1979年に工事は完全に中断した。

1980年11月23日の地震は、リオネ・テッラ内に一人居住していた司教にも避難を強いる。1983-84年の地盤沈下は、大聖堂の再建を完全に放棄させるに至った。その後、1994年には地元の建設会社「コンソルツィオーネ・リオネ・テッラ」の支援を受け、修復工事は一部再開された。

リオネ・テッラに住んでいた市民達は、かつての自分の家を毎日眺めながらも、そこへの立ち入りは今だ、禁じられたままである。司教館には、司教を補佐する寺男がいる。彼はリオネ・テッラ内で生まれ育った最後の世代であり、唯一市内で日中働いている一般市民だ。日曜日のミサは、司教館・大聖堂の双方に接続する SS.コルポ・ディ・クリスト礼拝堂にて行われる。この時のみ、かつての市民達はリオネ・テッラ内に戻ることが許されている。

大聖堂再生計画の設計競技

1970年の住民退去後、続く地盤沈下により、大聖堂は常に崩壊の危機にさらされてきた。2003年7月、カンパーニャ州は大聖堂再生のための国際設計コンペを開催する²³。リオネ・テッラの人口回復と文化的・経済的な再評価を目的に、その契機としての大聖堂の再生が期待されたのである。

再生のテーマは以下の3点に集約される。

- 1) 宗教施設としての大聖堂の機能回復
- 2) アウグストゥス神殿の考古学的・文化的価値の保存と見学ルートの設置
- 3) 建物の耐震および地盤沈下への有効な対策

ローマ大学教授ジョバンニ・カルボナーラ²⁴によってまとめられたコンペ要綱²⁵は、考古学

²³ Concorso Internazionale di Progettazione per il Restauro del Tempio Duomo di Pozzuoli- Rione Terra. Presidenza della Regione Campania preposto all'attuazione dell'art.4 L.18.04.1984, n.80.

²⁴ Giovanni Carbonara (1942-)ローマ大学ラ・サピエンツァ、文化財保存専攻主任教授。建築修復学におけるローマ学派の先達。著書に”Trattato di restauro architettonico. Grandi temi di restauro”, Torino, 2008. “Restauro architettonico e impianti”, Torino, 2001. “Avvicinamento al restauro. Teoria, storia, monumenti”, Napoli, 1997.など。

²⁵ Regione Campania. Il Bando di Concorso. Rione Terra di Pozzuoli. Progettazione di Restauro del Tempio-Duomo. Art.59 D.P.R.21 dicembre 1999, n.554- Licitazione privata ristretta europea. A.P.Campanelli, “Tempio-cattedrale a Pozzuoli”, AR 60/05, Bimestrale dell'Ordine degli Architetti di Roma e Provincia, 2005,

的価値と建築的価値を共に備えた歴史的建築物の保存・修復およびその活用のありかたに対して、大いに示唆に富む²⁶。科学的修復の近代的理論を踏まえた要綱には、以下のようなテーマが掲げられた。

- モニュメントのより良い保存のための全ての作業の従属
- “必要最小限の建築的介入”に対する基準
- 建物のオーセンティシティの尊重
- 新規に付加された要素に対して、旧情への可逆性、建物がもつ潜在力の尊重、新規要素が識別可能なこと、表情に富んだ現代的意義、物理的・化学的かつ象形的な互換性。
- 建築的積層および“マイナーな”証拠たる史的痕跡の尊重。

特に「新旧要素の明確な区別」、「周辺コンテキストへの十分な配慮」、「考古学的、ルネサンス・バロック様式の既存要素への最大限の尊重」の3点が、審査の主な基準として掲げられた。

さらにコンペ参加グループには、代表を務めるマスター・アーキテクトおよび協働者の他、下記の専門家を含むことが求められた。修復建築家以外は、コンサルタントとしての参加も認められている。

- 考古学者: 古代・中世建築を専門とする者。履歴書には古代ギリシャ・ローマ建築に関する研究業績を添付。
- 建築史家: ルネサンス／バロック建築を専門とする者。西ヨーロッパのキリスト教建築を専門とする者も可。
- 典礼学者
- 修復建築家: 大学卒業後に文化財保存のディプロマコースを修得した者。
- 構造設計者: 建築文化財の構造補強に関して複数年の経験をもつ者。
- 設備設計者: 建築文化財の保存分野で複数年の経験をもつ者。
- 修復技術者: 修復専門の研究所等で学んだ、大理石およびフレスコ画の修復を専門とする者。

このコンペ要綱には、イタリアのレストアウロの特質を考える上で不可欠な理念が、過不足無くまとめられている。包括的なモニュメントの再生・利活用を目指す要綱の意図は、コンペ主催者グループの考古学者ジュリアーナ・C. マナッセのそれと僅かにずれている。考古学者による報告書はあくまで“古代建築の本質的ライン”の“修復”を求めた。

歴史的価値が複雑に堆積するポッツォーリ大聖堂の再生計画は、各々矛盾すらあり得る内容の解決が求められる、非常に困難なものであった。コンペは2段階に分けて行われた。

pp.12-13.

²⁶ G. Carbonara, “La Chiesa Cattedrale-Tempio di Augusto a Pozzuoli: un innovativo concorso di restauro”, in A. Gianfrano (cur.), “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, Gianni Editore, Napoli, 2006, pp.19-22.

まずは1次審査によって12のグループが選ばれ、最終プレゼンテーションに進んだ。1次審査を通過した各グループの代表者とテーマ、計画の概要は下記の通りである。

1. マルコ・デッツィ・バルデスキ／再生羊皮紙の讃辞 **ELOGIO DEL PALINSESTO**²⁷

このグループは周辺コンテキストの読み取りから、大聖堂およびリオネ・テッラに見られる複数の対立概念を指摘する。古典／バロック、異教の神殿／キリスト教会、孤立／積層、考古学／典礼学、区別／分離、身廊／内陣など。こうした状況を踏まえて、透明なガラス壁の利用により、ローマ神殿の明確化と大聖堂としての内部空間の確保という矛盾の解決を図った。

2. グイド・バトッキオーニ／空と陸との中で **IN CIELO E IN TERRA**²⁸

バロック聖堂のファサード背後には空地が取られ、ローマ神殿のファサードを一部復元する。神殿の神室にあたる位置から大聖堂の内部空間が始まるが、その入口は円柱と同じ高さをもつ巨大な可動壁によって開放可能とする。上部には神殿及びバロック聖堂内陣部を覆う、波打つカーブをもつハニカムトラスの大屋根がふわりと架かり、建物全体をまとめあげる。

3. ルーカ・ゼヴィ／物事には方法がある **EST MODUS IN REBUS**²⁹

デ・フェリーチェが修復したRC造シャフト付きの円柱を、完全な姿に戻す。円柱内側にはこれと分離して独立したガラス壁を立て、内部空間を確保しつつ、上部にはかつての神殿と同じヴォリュームの勾配屋根を架ける。その前後、バロック聖堂のファサード背後および内陣前には高い陸屋根を置き、ルーバーとハイサイド・ライトによって内部に自然光を導く。

4. アレッサンドロ・アンセルミ／地霊 **GENIUS LOCI**³⁰

神殿部分およびバロック聖堂ファサードの上部に、L字型断面をもつ大屋根を被せる。大屋根の軒は聖堂ファサードを越えて、街路まで延長される。神殿部分の既存屋根は撤去し、エンタブラチュアの上は大きな吹き抜け空間とする。側壁は円柱と切り離して設置され、解放された列柱は考古学見学コースに開けたポルティコとなる。この大屋根によって、2つの廃墟：ローマ神殿とバロック聖堂は統一された建築となる。

5. コッラード・ボッツォーニ／権力の頂点の甘味 **DULCE AD SUMMAS EMERGERE OPES**³¹

12案の中で、最もローマ神殿の復元を優先した案である。ペディメントおよび円柱の復元と共に、神殿ファサードおよびポルティコを完全に復元する。既存のバロック聖堂のファサードとの間には小広場を取る。神殿ファサード前には階段を配し、基壇をつくる。大聖堂の内

27 AR 60/05, pp.14-15, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.25-36.

28 AR 60/05, pp.16-17, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.37-48.

29 AR 60/05, pp.18-19, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.49-60.

30 AR 60/05, pp.20-21, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.61-72.

31 AR 60/05, pp.22-23, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.73-84.

部空間は神室部分から始まり、中央に風除室を置く。床レベルはローマ神殿のものに合わせるため、バロック聖堂内陣の床はかさ上げされている。

6. ステッラ・カシエッロ／狂った飛行のために翼をつくる **FACEMMO ALI AL FOLLE VOLO**³²

バロック聖堂のファサード前にはL字型の柱梁を置き、建物入口としての象徴性を高める。既存ファサードの裏は小広場とし、建物の屋根は復元されたローマ神殿ファサードから始まる。神殿のポルティコ下では円柱の背後にガラス壁を置き、明確に新旧要素を分離する。バロック聖堂の内陣は、欠けた上部ヴォールト天井を復元する。このため、神殿ファサードでは切妻の勾配屋根だが、これが内陣に向かうにつれて軒を持ち上げ、最終的に内陣部では陸屋根となる。エンタブラチュアと軒先との間には出来る空隙はハイサイド・ライトとして、内部に光を取り込む。

7. デヴィッド・チッパーフィールド／三人称 **TERTIUM QUID**³³

ローマ神殿とバロック聖堂の二つの要素は、周辺コンテキストのヴォリュームから導かれた単純な幾何学形態の壁体内に取り込まれる。大聖堂の主たる内部空間となる神殿の神室部分には、最も高いヴォリュームが与えられ、周囲の街区からも頭一つ高い象徴性を与えられる。バロック聖堂内陣と聖堂ファサードは、同じ高さのブロックによって内包される。神殿円柱のみ新規ヴォリュームから切り離され、考古学見学コースから列柱群を望む。

8. コルヴィーノ＋ムルターリ／新しい革袋に入れた新しいワイン **VINO NUOVO IN OTRI NUOVI**³⁴

バロック聖堂のファサードから内陣手前まで、ローマ神殿部分の全体が、エンタブラチュア上部に高く掲げられた陸屋根で覆われる。陸屋根は円柱の内側に新設される角柱と、それをつなぐ梁によって支持される。内部と外部は透明ガラスによって区画され、分離されたローマ神殿の構造体を明瞭に見ることが出来る。白い新たな構造体は、円柱のモジュールと一致し、内部空間に白いグリッドのリズムを刻む。その姿はあたかもファシズム建築の美学を思わせる。

9. パスクアーレ・クロッタ／実在と架空のゲーム **LUDUS ABSENTIAE ET PRAESENTIAE**³⁵

バロック聖堂の遺構から、ローマ神殿の残存部分を完全に切り離す。神殿部分は新に、鉄骨造のガラスの箱にすっぽりと覆われ、鞘堂形式で保存・展示される。ガラスの箱を形づくる陸梁は、エンタブラチュア上部から延びる束によって支持され、外壁はあくまで透明感を追求する。バロック聖堂内陣は天井ヴォールトを復元しつつ、ガラスの箱と接続され、全体とし

³² AR 60/05, pp.24-25, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.85-96.

³³ AR 60/05, pp.26-27, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.97-108.

³⁴ AR 60/05, pp.28-29, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.109-120.

³⁵ AR 60/05, pp.30-31, "Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro", pp.121-132.

て一体の建築を形づくる。

10. ドナテッラ・フィオラーニ／魅力ある記憶の保持 *RETENTA AD MEMORIAM VENUSTATIS*³⁶

ローマ神殿部分はスペースフレームの大屋根で覆われる。軽量の屋根の選択は、建物の制震構造を考慮したものである。屋根の側面から入る光は天井面を透過し、天井全体が輝く光天井となる。内部空間は神室部分から始まるが、その頭上には柱のモジュールに合わせた位置に吊り下げ照明が配置される。大屋根の高さに合わせて、バロック聖堂のファサード上部には壁体が増築され、全体のヴォリュームをまとめる。

11. パオロ・マルコーニ／神殿/大聖堂：対立要素の混成 *TEMPIO/CATTEDRALE: COMPOSITO OPPOSITORIUM*³⁷

バロック聖堂のファサード入口より、大聖堂の内部空間が始まる。神殿のファサードはペディメント、円柱共に復元し、かつての姿を完全再現する。聖堂と神殿のファサード間はガラスの透明な屋根で覆われ、これを透かして神殿のペディメントを見ることができる。神殿のポルティコおよび神室全体が格天井で覆われ、一体感有る内部空間をつくる。バロック聖堂内陣は天井ヴォールトを復元し、神殿屋根と勾配を合わせた新設屋根を架ける。

12. トビア・スカルパ／世話を焼くこと *AVENDO CURA*³⁸

再生計画はクリストバル・デ・モラーレス(1500-1553)作曲の *Officium defunctorum* をモチーフとして、ジャズのように自由な構成を目指した。格子状のトラスでつくられた半円筒ヴォールトは聖堂全体を軽やかに覆い、ファサードにはバラ窓様の丸窓と矩形の入口が開く、ポスト・モダニズム風の壁面が立つ。洗練された空間の中に、露出されたローマ神殿の石の壁体がアクセントとなる。

賞金 10 万ユーロと共に最優秀賞を獲得したのは、建築家マルコ・デッツィ・バルデスキ(フィレンツェ大学教授)のグループであった。本グループのメンバーには、地下の考古学見学ルートをつくったアレッサンドロ・カスターニャーロが参加している。2位は G.バトッキオーニ、3位は L.ゼヴィのグループが選ばれた。

実施案に見る遺構の再生手法

コンペ終了後、工事は 2005 年から開始された。しかし予算等の問題から工事は中断され、今だに大聖堂のレストアは完結していない。以降、現地調査に従って、バルデスキによる 実施計画案³⁹における建物のオーセンティシティへの取り組みや史的痕跡の扱い方、技術

³⁶ Idem, AR 60/05, pp.32-33, “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, pp.133-144.

³⁷ Idem, AR 60/05, pp.34-35, “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, pp.145-156.

³⁸ Idem, AR 60/05, pp.36-37, “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, pp.157-168.

³⁹ “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, pp.170-180.

的解決の実態を見ていきたい。

「神殿・大聖堂 Tempio-Duomo」というコンペ時の呼称に現れているように、大聖堂は古代ローマ神殿とバロック聖堂が融合した、希有な建築物である。デ・フェリーチェによる修復ではローマ神殿の発掘と構造補強が優先されたが、今回の再生計画において第1に求められたのは、大聖堂という宗教施設の機能回復である。このため、建物の物的保存および良好な状態の保全を保証すること、また建築的機能と共に、大聖堂の文化的役割を十分に再生することが、再生工事における重要なテーマとなった。

屋根

大聖堂の屋根は、デ・フェリーチェによって復元された鉄骨構造の勾配屋根を保存している。遠目に白く光る姿が非常に印象的な屋根は、現地で発掘された大理石の瓦に基づき、かつてのアウグストゥス神殿がもっていた総大理石の姿を復元したものだ。

屋根下地は中空アルミパネルで、軽量・耐熱性に優れるフェノール樹脂製のサポートを使って、大理石の瓦を葺いている(丸瓦と平瓦の本瓦葺き)。大理石の厚みは5mmに押さえられ、下地と共に屋根の軽量化を図っている。周囲の歴史的景観に配慮して、大聖堂の空調設備機器は小屋裏の空間に収められた。そのため、屋根上には通気用のダクトが目立たない位置に突き出している。

ファサード

修復を待つ周囲の廃屋に対して、ローマ神殿の円柱および神室の壁面はきれいに清掃され、白く輝いている。一方でバロック聖堂のファサードは、いまだ焼け落ちたままの壁体を晒している。

聖堂へのアプローチは、新に架けられた鉄骨造の橋を渡って聖堂入り口に至る。透明ガラスの床を通して、足下の発掘された聖堂下部、ローマ期の地上レベルや遺構を見ることが出来る。

橋を渡って、バロック聖堂ファサードの中央入口をくぐる。入口にはオリジナルの木製扉が残っている。ファサードの裏側には小広場が設けられている。ここはかつてのバロック聖堂の内部空間であり、周囲には身廊に面していた旧礼拝堂の断片が並ぶ。この小広場はローマ神殿とバロック聖堂との境界を明確化し、ローマ神殿のファサードを復元するために設けられた。ガラスという新たな要素が加えられたローマ神殿と、バロック聖堂の風化し断片化した遺構は、レスタウロならではのユニークなコンポジションを見せる。

神殿のファサードはガラスを使ってその形態を復元し、材料の違いによって石造の残存部との区別を明確にしている。両脇の円柱はバロック聖堂の壁体内に取り込まれていたため、かなり削られてしまっている。正面左(西)側の半身になった柱は、RC造のシャフトを抱かせて補強されている。

大理石の風合いに合わせて磨りガラスで復元されたペディメントとエンタブラチュアには、

表面に黒い線でコーニスが描かれている。エンタブラチュアから下は透明ガラスが使われ、石造部分を再現した箇所と柱間の空間とを明確に差別化している。

床面には円柱の礎盤と柱身の平面が刻まれ、当初の位置を示している。柱心に立つガラス面には、円柱の立面がサンドブラストでプリントされた。失われた正面四本の円柱が有った位置に一致してリブガラス(ガラス製の方立て)が配置される。室内に設置されたリブガラスの形状は、円柱の立面(半分)を模している。ここでは新たに円柱を立てることなく、円柱のイメージがヴァーチャルに復元された。

側面の柱間では枠をつくらずに、テンションワイヤと DPG ジョイントでガラス壁を固定し、透明感を強調している。デ・フェリーチェが RC 造シャフトで復元した円柱は、大聖堂のビルディング・ヒストリーを語らせるためか、そのままに残された。

床

大聖堂の単廊式の身廊は、神殿のポルティコ及び神室がそのまま転用されている。聖堂の床は既存スラブを撤去して新設し、ファサード周囲では神殿の当初の床レベルを復元した。一方で内陣では既存のモザイク床を残したため、入口から内陣に向かう信者席部分にはゆるい傾斜がつけられている。信者席の床は木質フローリング仕上げで、ベンチもこれに合わせて新にデザインされた。

勾配床の左右ではガラスの手すりと共に、神殿正面の床レベルがバルコニー状に維持される。これは地下に残る共和制期の基壇部分を見せる、考古学見学ルートの設置と関係する。階下の見学通路の天井高を確保するため、勾配床の左右は水平とされた。

神室内部の付柱および柱間の疑似石積みでは、欠損部分を補完した箇所を表面から一段低くすることにより、新規部分を明確化している。正面奥、内陣の左右に残された神室の壁は、あたかも劇場建築のプロセニウム・アーチのようだ。ダウンライトが設けられた開口部上部の梁下、神室と内陣の境界ではファサードと同様に、床面に神室を示す壁体と円柱の位置と形状が記されている。ここはさらに、信者席の木質フローリング床と内陣のモザイク床との境界になっている。

内陣の室内装飾は、基本的に当時のままを保存・修復する。しかし失われたフレスコ画の破損部分は無理に補うことなく、断片としてそのまま見せている。祭壇および説教段は、新に現代風にデザインされた。

天井

デ・フェリーチェによる勾配屋根を残しつつ、その下に新設された格天井は、ローマ神殿のポルティコから神室までを一体に覆う。そのグリッドは神殿の円柱のモジュールにならったものである。

バロック聖堂内陣の天井ヴォールトはデ・フェリーチェによる修復時より、神殿側の1スパンが欠如している。欠けたヴォールトはそのままに隙間を維持しつつ、そこにオリジナルのコー

ニス断片を使って復元された神殿のティンパヌムを見せている。内陣より大聖堂の身廊を見返すと、ローマ神殿とバロック聖堂が明瞭に分離されながらも、一体の建築となっていることがわかる。

天井の格間には、トロンプ・ルイユ(だまし絵)の技法により、焼け落ちたバロック聖堂のヴォールト天井画が描かれる計画だ。これもファサードに見られる円柱の処理と同様に、2つの建築がもつイメージの、ヴァーチャルな再現といえる。

各部

SS.サクラメント礼拝堂は、手前の聖プロコロ礼拝堂の取り壊しに伴い、内陣から直接入れるように改造された。壁体内から掘り出された円柱は、ペンデンティブ・ヴォールトの背後に、その軸を上へと伸ばしている。ここは建物のビルディング・ヒストリーが史的痕跡の表出によって表現された、大聖堂の中で最も示唆的な空間だ。円柱は「文明の価値を有する物的証拠」⁴⁰であり、建物がもつ複雑な歴史的積層を解読するための材料として供される。礼拝堂の中央には、新に洗礼用泉水桶が設置される予定である。

聖堂参事会室は工事が未完のまま、窓もはまっていない状態である。天井ヴォールトに描かれた歴代司教のフレスコ画は痛みが激しく、修復を待っている。窓の向こうには、ポツォーリ市街と海を望む。部屋の片隅には、魅力的な曲線を描く石造のらせん階段が残る。

ファサードの脇、司教館および **SS.**コルポ・ディ・クリスト礼拝堂と聖具室への渡り廊下は、梁や天井、壁や床も全てガラスのボックス状になっている。ここからは司教館前の広場を見返して、大聖堂の側面や発掘されたローマ期の地表レベルを観察することができる。

バロック聖堂のファサードと直接つながっていた聖具室は、ローマ神殿のファサードの前に小広場を新たに設けたため、建物と切り離されてしまった。このため、**SS.**コルポ・ディ・クリスト礼拝堂につながる渡り廊下からのアクセスが確保された。コンペ案では部屋中央に地下に降りる階段があったが、これはとりやめとなった。

聖堂の側面、西側には小さなキャット・ウォーク状の通路とガラスの階段が新設され、ここから下の考古学見学コースへと降りることができる。ローマ期の地表に降りると、**SS.**サクラメント礼拝堂下に設けられたピロティがあり、その奥にはカピトリウム他のローマ遺構を見ることが出来る。

司祭館と鐘楼

実施計画には内陣の西側に司祭館 **Canonica** の建設が含まれる。これは廃墟と化して凝灰岩の壁体を残す旧司祭館の位置に、聖堂参事会員の住居と共に、内陣地下に設けられる大聖堂博物館へのアクセスを兼ねている。発掘された碑文などを展示する博物館からは、大聖堂下の共和制期の基壇につながる見学コースが設けられる。建物は旧司祭館の壁体を保存しつつ、その内側に新たな鉄骨造のガラスの箱を挿入しており、その外観には新旧

40 “testimonianze materiali aventi valore di civiltà” (G. Carbonara)

のコンポジションが明快に現れる。

司教館の北側角には、鉄骨造の軽やかな鐘楼が計画されている。火災の後、崩壊の危険があった鐘楼は、1968年の修復工事の際に取り壊された。コンペ案では、鐘楼はらせん状の塔に鐘が吊られたデザインであったが、実施案では新に「花咲く樹木」をイメージした繊細な姿の鐘楼が考えられた。そこには古い鐘楼から取り外された、ブロンズ製の3つの鐘が移設される予定である。

まとめ

ポツォーリとその心臓部であるリオネ・テッラは、古代ギリシャからの長い歴史が複雑に積層する、非常に魅力的な土地である。地震と地盤沈下によって歴史的な中心地区の全住民が疎開させられ、今なお帰ることが出来ない現状は、我が国の東日本大震災で被災した町と人々を思い出させ、人ごととは思えない。

大聖堂の再生工事は今だに道半ばであるが、コンペ要綱は歴史的積層によって生み出された希少な建物への建築的介入に対する指針を示した。レストアウロの理念を明確化したその功績は、非常に大きい。有名外国人建築家の作品を含む応募案の中から選出されたバルデスキ案は、パラッツォ・デッラ・ラジョーネ(ミラノ)等の彼の作品に見られるように、既存部分の完全な保存と、金属とガラスを多用した軽やかで現代的な新規部分との対比によって、再生建築の魅力を引き出している。

ローマ神殿とバロック聖堂はそれぞれ異なる建築的特質を備えるが、その混在こそがこの建物のオーセンティシティを生み出している。磨りガラスによるペディメントの再現および透明ガラスを使った柱間の処理は、アウグストゥス神殿の形態を現代的な手法でイメージ復元しつつ、大聖堂という宗教施設の機能を見事に両立させた。史的痕跡の表出および周囲との差異化によって、神殿とバロック聖堂の分離と融合を成功させた繊細な手法の選択には、周辺コンテクストの丹念な読み取りから得られた知見が十分に活かされているといえよう。

大聖堂再生工事の完遂には数多くの問題が残されているが、これを起爆剤としたリオネ・テッラの文化的・経済的な再評価が待たれる。市内に残る歴史的住宅の修復および構造補強工事が早期に完了して、この貴重な歴史的な中心地区への住民の帰還が実現し、本当の意味での都市の再生・復活がなされることを願うものである。

謝辞

本調査は建築家アレッサンドロ・カスタニャーロ氏(ナポリ大学講師)の全面協力により行う事が出来た。またポッツォーリ司教シルヴィオ・パドイン氏には大聖堂の拝観と共に、司教館屋上からの建物撮影の特別許可をいただいた。e-Campus 大学准教授オリンピア・ニリオ氏には、調査のコーディネートにご尽力いただいた。さらにナポリ大学教授テレーザ・コレッタ氏には、予備調査の段階から数々の学術的助言をいただいた。上記各氏にはここに記して、心からの感謝の意を表す。

参考文献

- F.Castagnoli, “Topografia dei Campi Freglei”, in *I Campi Freglei nell’archeologia e nella storia*, Atti Convegni Lincei, n.33, Roma, 1977, pp.41-79.
- P.Sommella, “Forma e Urbanistica di Pozzuoli Romana”, in *Puteoli, studi di storia antica*, II, 1978.
- C.Gialanella- V.Sampaolo, “Note sulla topografia di Puteoli”, in *Puteoli, studi di storia antica*, IV-V, 1980-81, pp.133-161.
- R.Giamminelli, “Il centro antico di Pozzuoli”, Sergio Civita Editore, Napoli, 1987.
- T.Colletta, “Pozzuoli città fortificata in epoca vicereale. Una mappa inedita conservata alla Biblioteca Nazionale di Parigi” in *Storia dell’Urbanistica. Campagna/ I*, Roma, 1988, pp.7-40.
- F.Pistilli, “Pozzuoli, centro storico e bradisismo. Le vicende dell’ultimo ventennio” in *Storia dell’Urbanistica. Campagna/ I*, Roma, 1988, pp.57-62.
- F.Zevi, “Il Tempio di Augusto a Pozzuoli: Una nota” in *Scritti in memoria di R.Causa*, Napoli, 1988, pp.29-35.
- S.De Caro-A.Greco, “Campania”, Laterza, Bari, 1993.
- C.Gialanella, “La topografia di Puteoli”, in F.Zevi (cur.), *Puteoli*, Napoli, 1993.
- a cura di F.Zevi, “Puteoli”, Napoli, 1993.
- C.Gialanella-C.Valeri, “Puteoli. Nuovi scavi e ricerche” in *Bolettino d’Arte*, n.118, 2001.
- S.De Caro-C.Gialanella, “Il Rione Terra di Pozzuoli”, Electa Napoli, 2002.
- S.De Caro, “Campi Freglei”, Electa Napoli, 2002.
- C.Gialanella, “Nuovi dati sulla topografia di Puteoli alla luce degli scavi in corso sull’acropoli del Rione Terra”, in AA.VV., “da Puteoli a Pozzuoli”, 2003.
- F.Zevi, “Il complesso architettonico del Rione Terra a Pozzuoli”, in AA.VV., “da Puteoli a Pozzuoli”, 2003.
- S.Adamo Muscettola, “La cultura figurativa della città”, in “da Puteoli a Pozzuoli”, Electa Napoli, 2003.
- a cura di L.Crimaco, C.Gialanella, F.Zevi, “da Puteoli a Pozzuoli”, Electa Napoli, 2003.
- Il Bando di Concorso. Regione Campagna. Presidenza della Regione Campagna preposto all’attuazione dell’art.4 L.n.80 del 18.04.1984. Concorso Internazionale di Progettazione per il Restauro del Tempio Duomo di Pozzuoli- Rione Terra, 2003.
- S.De Caro, “I Campi Flegrei, Ischia, Vivara. Storia e archeologia”, Electa Napoli, 2003.
- A.Castagnaro, “Antico e Nuovo”, in *AR 53/04. Bimestrale dell’Ordine degli Architetti di*

Roma e Provincia, 2004.

- M.D.Bardeschi, “Regione Campagna. Presidenza della Regione Campagna preposto all’attuazione dell’art.4 L.n.80 del 18.04.1984. Concorso Internazionale di Progettazione per il Restauro del Tempio Duomo di Pozzuoli- Rione Terra. Progetto Definitivo”, 2004.
- A.P.Campanelli, “Tempio-cattedrale a Pozzuoli”, in *AR 60/05. Bimestrale dell’Ordine degli Architetti di Roma e Provincia*, 2004.
- ” Concorso Internazionale di Progettazione per il Restauro del Tempio Duomo di Pozzuoli- Rione Terra”, in *Procvlvs. Rivista trimestrale della diocesi di Pozzuoli*, Napoli, 2005.
- G.Carbonara, “La Chiesa Cattedrale-Tempio di Augusto a Pozzuoli: un innovativo concorso di restauro”, in A.Gianfrano (cur.), “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, 2006.
- a cura di A.Gianfrano, “Tempio-Duomo di Pozzuoli. Progettazione e Restauro”, Gianni Editore, Napoli, 2006.